

古代豪族宗像氏

新原・奴山古墳群は宗像氏の重鎮らのために造られました。宗像氏について記述された最古の文書としては、古事記(712 年)と日本書紀(720 年)そして 815 年に完成した系譜・新撰姓氏録がありますが、それよりもずっと早い時期に著名になったことを示す証拠があります。大和朝廷は遠隔地では特定の一族に重要な宗教的役割を割り当てるなど、大和時代(300-710 年)初期から祭祀の遂行が、国家形成や統治の重要な要素であったと考えられています。宗像氏は朝廷に代わって沖ノ島の祭祀を取り仕切りましたが、重要な貿易路の守護者としての役割も果たしたと考えられています。

九州北西部の宗像氏が統治した地域は、日本と朝鮮の最短経路(玄界灘を横断)と、九州と本州の海路であり、そこに大和朝廷の中核地域が位置していました。7 世紀までに、宗像氏が郡奉行と大宮司を兼務するようになり、記録によれば宗像氏の娘と天皇の間に姻戚関係も成立し、その地位を強固なものとししました。沖ノ島での祭祀の終了後も、宗像氏は沖津宮・中津宮・辺津宮の大宮司としてあり続けました。1586 年に最後の男性である宗像氏貞が死去し、家系が突然途絶えましたが、現在もこの地ではその名が残っています。